

甲状腺外科草子 68

豊臣家の柱石：秀長

杉野 圭三

覇業を成し遂げた人物の陰には有能な補佐官が存在する。織田信長は例外だが、源頼朝には北条義時や大江広元、徳川家康には本田正信という補佐官が存在した。

豊臣秀吉を補佐した弟秀長の記録は驚くほど少なく、武功や逸話も殆どない。

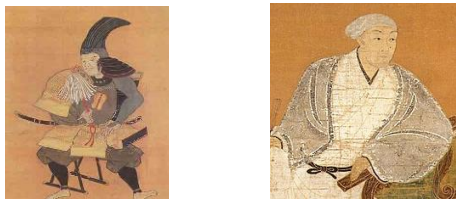


秀吉 (1537-1598) ねね (1548?-1624) 秀長 (1540-1591)

秀長は秀吉の異父弟（異説あり）とも言われ、永禄五年（1562）頃に秀吉の要請で出仕したらしい。22歳ごろまで百姓だった男の人生は大転換を遂げ、兄の出世に伴い、永禄八年（1565）には三十貫を兄から支給されている（秀吉の俸禄は当時三百貫）。かなりの好待遇で、兄の1/10を終生与えられている。

最初は文字の読み書きさえ不十分だった男は努力の人で、その書は達筆で勘定や仕分帳付け（簿記）、経営にも優れた才能を発揮した。堺からの鉄砲・弾薬の仕入れ、軍資金調達で秀吉を支えたものと考えられる。

秀吉の家臣団で有名なのは、前半では軍師竹中半兵衛、黒田官兵衛だが、軍師と補佐官では役目が天地ほども異なる。



竹中半兵衛 (1544-1579) 黒田官兵衛 (1546-1604)

その後、秀長は兄と共に、斎藤龍興との戦い（1564）、墨俣一夜城建設（1566）、但馬出兵（1569）、朝倉義景討伐（1570）、姉川の戦い（1570）、長篠の戦い（1575）など休む間

もなく働き続けている。

小牧・長久手の戦い（1584）では甥の秀次（1568-1595）が大失態を演じ、秀吉の不興をかけている。このため、翌年の紀伊雑賀征伐（1585）では秀長が秀次を補佐し汚名を雪ぐ機会を与えている。

同年6月、「四国攻め」では総大将として10万以上の軍勢で長宗我部元親を降伏させ、紀伊・河内・大和の100万石大名となり、治安維持や掟の制定などの行政に優れた手腕を発揮し民衆からも慕われた。

天正14年（1586）頃から体調が崩れやすくなったと思われるが、翌年（1587）の「九州平定」の総大将として出陣。

天正18年（1590）頃から病が悪化し、天正19（1591）年、病死。享年52。

秀長死後の翌年に朝鮮出兵が始まる。

文禄の役：天正20年（1592）-文禄2年（1593）



石田三成 加藤清正 福島正則

秀次切腹：文禄4年（1595）、謀反の疑い。

秀次切腹後、三条河原で行われた一族処刑の残酷さは長く記憶される悲劇となった。



秀次 淀殿 秀頼

慶長の役：慶長2年（1597）-慶長3年（1598）

豊臣秀長という柱石を失った後、秀吉を補佐し諫言する者もなくなり、わずか数年間で朝鮮出兵、秀次切腹、家臣団の反目など豊臣家の崩壊が始まる。

参考資料：豊臣秀長（堺屋太一）、Wikipedia

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2023年6月21日